

「セント日本人です。そのことを大事にしたいし、いろんな体験、実験を重ねたかったんです」

来日を決めたときの心のうちを、いまハヅ氏はそんなふうに語っている。

一九七〇年の大阪万国博終了後、帰国するが、翌年、また日本との縁ができる。日糸カナタ人のアイスホッケーチームを引率して、各地で十一試合（うち八試合に勝つ）を行なった。

そのうち、日本で生活することを本気で考えた。そして、知人もなくさんいる大阪に本当にやってきた。一九七三年のこと。

彼は大阪・住吉区の民間の英語学校で英語を教えるかたわらで、事業を始める。カナタと日本の貿易業に目をつけた。アイスホッケーをはじめとするカナタのスポーツ用品の輸入である。スポーツ用品では、カナタの方がすぐれた用品がたくさんあるからだ。

梅田に設立した貿易会社にCMAのFRI TRADING CO.（カセイ・トレーディング）という社名をつけた。CMAのCはとZISBのZを合成してつくったという。

最近、営業品目に競走馬が加わった。日本はイギリスなどから、タネ馬を輸入しているが、もともと親は北米産だという。そんなことから、いっそ、北米から輸入する方が費用も安上がり、という理屈を、彼は実行したのである。いまでは、競馬用のタネ馬を扱っているノースアメリカン・アラブドストツク社の販売代理

店も兼ねているというから、将来、彼の手がけた馬が日本の競馬場を走り回るはずである。

ハヅ氏が育てたアイスホッケーチーム「梅田メーアルリアス」で彼が教え「梅田メーアルリアス」で彼が教えたことは、「勉強が一番、アイスホッケーは二番」ということだった。学校での成績がよくないのに、アイスホッケーでうまくなっているのは本物でない、とのカナタでの信念をそのまま大阪に持ち込んだ。

そうだ。

ハヅ氏には、今夏、また新しいチャンスが巡ってきた。北海道の製紙会社から、アイスホッケーのヘッドコーチ就任の聲がかかったのである。考えた末、彼は引き受けることにした。二シーズンの契約である。「日本のナンバー3にはしめてみせる」という意気込みだから、これからは、大阪よりも北海道で暮らす生活がふえらなう。梅田のチームはアシスタントにまかせた。

貿易の方も、完全に手を引くわけにはいかないだろう。

「何といっても日本は経済が活発。日本に在る限り、中国、台湾、ベトナムなどアジア各国を相手にビジネスの手を広げることができる。それがまた楽しい」大阪には、福岡生まれのアツ子夫人がいる。結婚十二年。子供はいないが、夫人は文字通りハヅ氏の片腕である。

実兄のジュンさんはバンクーバーの日系老人サロンの「隣組」開設者の一人。三年前、同地で病死した。

座禪を組むフーチンさん



私はバンクーバーでジュンさんに、大阪でケンさんに会ったわけだが、人の不思議な縁のつながりを感じないわけにはゆかない。

フーチン・座禪

禪の道を求めて修業八年

形部 脩

年は、小浜の禪寺の話を聞いて、迷わず

小浜にやってくる。現在、アメリカ五人、ドイツ人四人、フランス、カナタ人すつ十一人の青い目の青年僧が俗世間を離れ、ひたすら修行を積んでいる。カナタのバンクーバー市出身のグレーン・フーチンさん（三十一歳）もその一人。僧名は「俱璉（ぐれん）」。アリタイツシユ・コロビア大学で生物学専攻の大学

生であつたが、勉強するだけの人生に飽き足らず、内面的な充実と人生の意義を求めて日本に來たのが十年前のこと。小浜の発心寺での「求道」生活はもう八年を数える。

発心寺での生活は毎日が同じ修行の繰り返しで、毎朝四時に起床、二時間の座禪をした後、本堂や庫裏、便所、境内の清掃、朝の読経、そして原田雪恵（せつけい）住職から禪や仏教の講話を受けるといった日課。食事の作法や食べ物も、修行中の日本人僧と全く同じで、薄暗い庫裏の板の間

（産経新聞大阪本社社会部記者）